

◇ 第一章

ふわりと鼻腔をくすぐったのは、硫黄の独特な匂いだった。

(……あれ？ 近くに温泉なんてあったかな。もしかして新しくお店ができたのかも)

仕事を終え、重い足取りで歩いていた帰り道。

重なる残業で肩は岩のように凝り固まり、体全体が鉛のように重い。明日が休みという解放感も手伝って、私は吸い寄せられるようにその香りのする方へと足を進めた。

静まり返った夜道に自分の靴音だけが響く。街灯の光はいつの間にか遠ざかり、どこからともなく霧が立ち込めてきた。冷気を含んだ湿った空気が肌をなぞり、不

意にゾクリとした寒気が背筋を駆け抜ける。

（なんだか深い路地に入り込んだじゃった……）

不安に胸を騒がせ引き返そうとした時、濃厚な霧の向こう側に、温かな灯りが浮かび上がった。灯りの近くで揺れているのは、風情ある赤色の暖簾。

（良かった、ちゃんとお店を見つけれられた……。それにしても、すごく立派な建物……）

霧の中にひっそりと佇むその建物は、古風でどこか浮世離れをした、古民家風の佇まいをしていた。

そして暖簾の脇に立てかけられた木の看板には、柔らかな達筆で『足湯と施術処』と書かれている。

「足湯と施術処……」

私はズキズキと痛む重い肩を思わず手で押さえる。

足湯に浸かりながら、マッサージをしてもらえるお店なのだろうか。そんな期待

を抱いて、私は暖簾をくぐり抜けた。

「……すみません、まだ営業してますか？」

引き戸を開けて顔を上げると、そこに立っていたのは、息を凝らすほど美しい和装の青年だった。

後ろで緩く一本に束ねられた薄い金色の長髪、吸い込まれそうな琥珀色の瞳。端正で目を引く容姿だが、何より私の目を奪ったのは――彼の頭頂から生えたふわふわとした狐の耳と、腰元から覗く大きな尻尾だ。

（コスプレ……？）

あまりの完成度の高さと現実離れた美貌に感心してしまう。驚いてしまったけど、もしかしてそういうコンセプトのお店なのかもしれない。

「おや……これは珍しいお客様ですね。いらっしゃいませ。まだ営業しておりますよ」

深く澄んだ声で囁くと店主さんは、上品で優しげな笑みを深めた。

「中へどうぞ。お部屋へご案内致しますね」

「はい……、お願いします」

促されるまま土間で靴を脱いで、彼の後について行く。

「それにしても……この店を見つけたのは難しかったでしょう。どうやって辿り着かれたのですか？」

「硫黄の香りを辿って……」

「あはっ、それはまた随分と嗅覚が優れていますね」

振り返った彼は口元に手を添えて、可笑しそうに喉を鳴らして微笑んだ。なんだか自分が餌に釣られてやって来た犬のようで少しだけ恥ずかしくなる。

「ですが、お客様は運がいいですよ。人の子がこの店に辿り着くことは滅多にないのですから」

「……え？」

（人の子……？）

「さあ、こちらのお部屋で施術着へのお着替えをお願いします」

気になる言い回しに気を取られていると、彼は足を止めて目の前の部屋の中に用意されていた籠を私に手渡した。

その籠の中には、綺麗に畳まれた薄手の白い浴衣が入っている。

「この浴衣以外はすべて脱いでしまってくださいね。下着も含めて、肌になにも身につけない方が、施術の効き目がずっと良くなりますので」

「え……っ、全部ですか？」

「ええ、全部ですよ」

彼は平然と言葉を繰り返した。

私は籠の中の浴衣を見下ろす。下着を身につけずにこの浴衣を着れば、乳首が透けて浮かび上がってしまうだろう。そんなの恥ずかしすぎる。

「おや？ そんなに顔を赤らめてどうかなさいましたか？ ああ、もしかして……ふふっ、肌が透けてしまうのは『普通』のことですから、お気になさらないでくださいね」

男の人にそんなことをさらりと言われ、カッと頬が熱くなる。けれど彼の琥珀色

の瞳には、不純な色は一切宿っていなかった。

それにあまりにもなんて事のないように伝えられるので、自分が意識しすぎているのかもしれないと思ってしまう。

（これが普通ってことは、他のお客さんもこの浴衣を着てることだよ……）

「わ、わかりました……」

「もし着方がわからなければ、お手伝いいたしますので、遠慮なく私をお呼びくださいね」

「き、着方は大丈夫です……！」

「おや、そうですか？ それでは、お着替えが終わりましたら、奥の縁側でお待ちください」

「……わかりました」

「私も用意ができましたら、すぐにそちらへ向かいますね。それまで、ごゆっくりとお過ごしください」

店主さんは丁寧に頭を下げると、ゆつくりと引き戸を閉める。部屋に一人残され

た私は、籠の中の浴衣を見下ろしてゴクリと息を呑んだ。

（ここまできたら、着るしかない……!）

意を決して服を脱ぎ、浴衣に袖を通す。

丈は膝のあたりまでしかなく、生地も肌が透けてしまうほど薄い。体を動かすたびに、すべすべとした布地が素肌を淡く擦り、胸元が少し心もとない。

（丈も短いし……やっぱりちよつと乳首透けてる……）

胸の頂上が僅かに膨らみ、奥のピンク色が布地から透けてしまっている。

（恥ずかしいけど、店主さんはこれが普通って言っていたし……）

違和感を覚えつつも、言われた通り奥の障子を恐る恐る開ける。そこには柔らかな灯りに包まれた風情ある庭園が広がっていた。そして中庭に面した広い縁側には、湯気を揺らめかせる足湯が用意されている。

「わぁ……!」

非日常のような美しい光景に目を奪われ、私は見惚れたまま足を進め、ゆっくり

と足湯へ浸かる。少し熱い温度が心地よく、疲れを癒してくれる。

私は足湯のそばに置かれた座布団の上に腰を下ろし、蕩けるように瞼を閉じる。

聞こえてくるのは、湯口から注がれるお湯の流れる音。穏やかな風が草花を揺らす音。

騒がしい日常から遮断されたような、不思議と落ち着く空間だ。

(他にお客さんもないから、まったくつろげるな……)

そんな空間に癒されていると縁側の奥から規則正しい静かな足音が聞こえてくる。

「お湯加減はいかがですか？ 熱くありません？」

振り返ると和装の袖をたすき掛けにした店主さんがお茶の置かれたお盆を持って私の方まで歩み寄って来た。

引き締まった細身の体に思えたが、たすき掛けによってあらわになった腕の美しい筋と手首。そこから覗く男性的な骨格に思わず心臓が跳ねる。

「ちよ、ちよどうぞ良くて心地いいです……」

「それはよかった」

彼はそのまま私の隣に膝をつくので、とつきに両腕で胸元を隠して身構えてしまった。

（そんなに近いと、胸元が透けていることがバレちゃう……）

けれどそんな私の不安に反して、彼はただ穏やかに微笑んでいる。

「温かいお茶をご用意しましたので、よければこちらどうぞ」

「……ありがとうございます」

（気にされてない……？）

思えばここはお店。私以外にも女性のお客さんはいるだろうし、彼の美貌であれば女性の身体なんて見慣れているのだろう。私の肌が透けているなんて、些細なことなのかも……。

（大人気なく意識してしまって、ちょっと恥ずかしいな……）

彼の自然体に安堵しつつ、渡されたお茶を口に含む。甘くまろやかな味わいの飲みやすい緑茶だった。

「んっ……！ 苦味が少なくって美味しいですね。やっぱり特別な茶葉なんですか？」

「いいえ、普通の茶葉ですよ。ただ少しだけ蒸し時間を長くとってあるんです。そうすることでコクと甘みが出るので、ぜひご家庭でも試してみてください」

「へえ……そうなんですね！ 家でも試してみます」

私は感心しながらまた一口お茶を飲み、ほっと息をつく。

（お店の雰囲気もそうだけど、店主さんの口調も穏やかで、すごく安らぐかも……

）

「ふふっ、緊張も和らいでこられたようなので、施術を行っていきますね。どちらから解しましょうか？」

「肩がすごく凝っていて……そこをお願いできますか？」

「かしこまりました。肩こりだと背中やその周辺にも触れてしまいますが、問題ありませんか？」

「はい、大丈夫です」

「それでは、後ろから失礼します」

すつと彼の気配が背後に回る。そして彼の温かく大きな手が私の両肩に置かれ、凝り固まった肩の肉をぐつと深く押し込んでいく。

「んっ……あ……」

「力加減はいかがですか？ 痛くありません？」

「はい……すごく気持ちいいです……」

「ふふっ、それは良かったです。不快だったり痛ければ、遠慮なく仰ってくださいね」

耳元で囁かれる優しい声。彼の手がうなじから肩、背中へとすべっていく。凝り固まった上半身が解されていくたび、徐々に重かった身体が軽くなる。

（力加減もちょうど良くて、すごく気持ちいい……）

あまりの心地よさに私はうつとりと目を細めた。こんな穴場なお店を見つけられるなんて、本当に運がいいかも。満足感に浸っていた、その時――。

浴衣越しに背中を解していた彼の指先が、緩やかな弧を描きながら横へ滑り、私の胸の側面をスリツとなぞった。

「……っ！」

際どいところを触れられ、思わず身体が跳ねる。けれど彼はそんな私を気にすることなく、横乳へ手を添えて、たぷたぷ♡と柔肉を揺らす。

（え……？ 胸の横に指が当たって……脇に近いから気づいてない……？）

混乱する私の思考を置き去りにして、彼の手は更に前へと回り込み、浴衣の薄い布地越しに豊満な胸の膨らみを包み込むように優しく圧をかけてゆつくりと揉み始める。

「んっ♡ ……あ、あの……店主さん……」

「はい、いかなさいましたか？」

呼び止めても彼は手元を休めず、むにむに♡と私の胸を揉み続けている。

「あ、あの……っ、手が……胸に、当たって……っ」

恥ずかしさで声を震わせながら指摘すると、彼は私の耳元で小さく笑った。耳に吹きかけられた温かな吐息に、肌が僅かに震えてしまう。

「おや、これは失礼いたしました。……ああ、でも、お客様は肩こりに悩まされているのですよね？」

「あつ♡ そうです、けど……っ」

「日常生活で凝り固まることもあります、お客様の場合お胸からの影響も多いのではないのでしょうか。お客様のお胸は、豊かですから……」

大きな掌が下から胸を掬い上げるように添えられ、むにゅり♡と柔らかい重みが彼の手の中に収められる。

「ほら、こうやって……持ち上げると大きさがよく分かりますね。こんなに揺れて……肩への負担も大きいはずですよ」

そして耳元で低く囁かれながら、たぷり、たぷり♡と優しい手つきで下から上へと持ち上げ揺らされる。

「んっ……♡ そうなんですかつ……っ？」

「ええ、胸全体が凝り固まっていると、どうしても肩や背中に負担がかかってしまうのですよ。ですから……ここもしつかり解さないと、根本からは良くなりませんよ?」

「で、でも……こんな……んっ♡」

「大丈夫ですよ。これはただの『施術』の一環ですから……。ほら、もつと身体のを抜いて、私に寄りかかってください……」

(でも……こんな施術聞いたことない……)

そう頭では分かっているのに、この心地よい空間や彼の妖しくも魅力的な雰囲気
に不思議と吞まれ、私は自身の背中を彼の胸の中へと預けてしまった。

「そう……良い子ですね……♡」

耳元で店主さんの甘い声が囁かれると、彼の大きな手で胸全体を包み込まれ、じ
わりと圧をかけながら大きな円を描くように揉み解される。

「んっ……あ……♡」

掌全体で優しく揉み潰され、凝り固まった肉が和らいでいくようで心地いい。け

れど同時に、揉まれるたびに胸の先端が浴衣の生地で擦れ、淡い刺激を与えられてしまう。

（気持ちいいけど……布で乳首が擦れて……っ♡）

意識すればするほど、その擦れをもどかしく感じてしまう。その時、彼の指先がスリ……ッ♡と撫でるように乳首の先端を掠めた。

「ひやつあ……っ♡」

「……すみません、指が当たってしまったて。……あ、少し膨らんでしまいましたね……よしよし、痛かったですね」

「んっ……！ 撫でちゃっ……っ♡」

店主さんは人差し指で、尖り始めた私の乳首の先端をスリスリ♡と慰めるように撫で擦る。

すると徐々に私の乳首が恥ずかしいくらい立ち上がってしまい、ぷつくりと膨らんできた。

「ねえ……もしかして、感じちゃってます？」

私の耳に唇を触れ合わせながら、鼓膜を直接震わせるように囁かれ、思わず頬を赤らめてしまう。

「これはッ……ちがつ……んっ♡」

「ふふっ、違わないでしょ？ ほら……見てくださいよ。服の上からでもハッキリ形がわかるくらい乳首、勃起しちゃっていますよ？」

「っ……！」

「ちよつと慰めてあげただけで、こんなにいやらしく勃たせてしまつて……エッチですね♡」

店主さんは意地悪く耳元で囁きながら、私に見せつけるように人差し指で尖った乳首の輪郭を服の上からなぞつていく。うつすらと透ける乳輪や根元、先端をくるくる♡すりすり♡と撫で回される。

「んっ、あつ……すりすり、ダメえ……っ♡」

「あはっ、さっきよりも硬くなってきた……♡ ここも、凝りを解してあげたほうが良さそうですね」

「そこっ解さなくても……あつ……♡」

すると私がすべて言い終える前に、人差し指と親指で浴衣の布地ごと両乳首を摘まれてしまった。そのまま指の腹でコリコリ♡と捏ね回される。

コリコリコリ……♡ こすこすこす♡

「あっんあっ♡」

乳首を捏ねられるたび身体の奥が熱を帯び、甘い声が溢れてしまう。私は咄嗟に両手で口元を覆った。

「声、抑えなくても大丈夫ですよ。外には聞こえませんから」

「それ、でも……っ、恥ずかしい……んっ♡」

いくら静かなお店で、今は私たちしかいなくても、ここは中庭に面した縁側。ほぼ屋外のような場所で店主さんに胸を弄ばれ、こんな情けない声を上げてしまうなんて恥ずかしい。

「ふふっ、照れ屋さんなんですネ。でも……私は貴女の可愛らしい声、もつと聞きたいので抑えて欲しくないな……♡」

甘くおねだりをするようにそう囁かれると、乳首をぎゅっ♡と強く摘まれる。そのまま乳首に圧をかけるようにむぎゅ♡むぎゅ♡とすり潰され、私は肩を震わせ耐えきれず声を漏らしてしまった。

「ひやあっ……♡」

「やっぱ可愛い声♡ そのまま我慢しないでくださいね？」

「やつ、あ……止めてっ……♡」

「あはっ、まだ凝りを解せていないので駄目です♡ 止めてあげません♡」

「んあぁ♡」

むにむに♡ こりこりこり♡ むぎゅ、むぎゅ……♡

視界が開けているため、自分がどんな手つきで彼に胸を揉まれているかが丸見えだった。

店主さんは楽しげに声を弾ませながら、胸の下に手を添えて両方の乳首を執拗に弄んでいる。

「やつあ……っ、もダメっ……♡」

（こんな施術、絶対におかしい……っ、それなのにどうして私、こんなに気持ちよくなってしまうの……？）

頭の中では「おかしい」と警告音が鳴り響いているのに、彼の指先が触れるたび快感が全身の神経を痺れさせ、更なる刺激を無意識に欲してしまう。

恥ずかしさで泣きそうになりながら頭を振るが、彼の手を振り払うことすらできない。

「そろそろ血行も良くなってきましたし……オイルを使って解していきましょうか」

「オイル……？」

「はい、少し失礼しますね」

彼の長い指先が、私の浴衣の合わせにすつとかかった。そしてゆつくりと左右に開かれ、私の胸元が晒される。

「あ……っ、ダメ、待って……！」

慌てて胸を隠そうとした私の両手は、彼の大きな片手によって易々と捕まり後ろへ回されてしまう。

「恥ずかしがらなくても大丈夫ですよ。言っただでしょう？　これはただの施術。普通のことですからね？」

洗脳されるように耳元で囁かれ、自然と抵抗しようとしていた身体から力が抜けていく。彼は満足げに喉を鳴らすと、小瓶に入った金色のオイルの蓋を開ける。そして甘い花の香りがする、温かなオイルが胸の上へと垂らされた。

「ん……っ」

とろりとした重みのある液体が、肌を伝って胸の谷間へと流れていく。

店主さんは両手でオイルを胸全体へと広げるように、滑らかに塗り込んでいった。

「んふう……あ……♡」

オイルで濡れた彼の掌が、豊満な胸の輪郭を撫で上げていく。その滑らかな感触が心地よくて、思わずうつとりしてしまふ。

次第に彼の人差し指が胸の先端へと滑り、オイルで濡れた私の乳輪をくるくる♡

と優しくなぞり始めた。

(あ……っ、そこじゃなくて……)

あと数ミリで、一番触れてほしい乳首に届くのに。

くるくると周りをなぞるだけで、一向に先端には触れてくれない。

焦らすような丁寧で甘い指使いに、胸の奥がじりじりと焼けるように疼き出す。

早く乳首に触れてほしい、揉み潰してほしい——そんな破廉恥な欲求で頭をもたげそうになった、その瞬間。

ぬるっ♡と、彼の指先が一度だけ乳首を掠めた。

「あ……っ♡」

触れられた、と思った時にはもう指先は通り過ぎている。ほんの少しの刺激が、逆にもどかしさを何倍にも膨らませる。

「ふふっ、どうかなさいましたか？ そんなに物欲しそうな可愛らしいお顔をして

……」

彼は肩口から私の顔を覗き込みながら、クスクスと揶揄うように笑みをこぼした。

「んっ♡ 店主、さん……もつと、……っ」

「もつと、だけではわかりませんよ？ どこを、どうして欲しいのか……お客様の
お口で私に教えてくだらないと……」

意地悪く囁き、また乳輪をくるくる♡と撫で、一瞬だけ乳首を掠めるようにカリ
ッ♡と弾かれる。それを何度も繰り返される。

スルスル……カリッ♡ くるくるくる……♡

「ほおら……早く言つて？ お客様もこのまま、焦らされるのは嫌でしょう？」

彼は私の耳に唇を押し当て、ゆっくりと滑らせながら急かすように甘く囁く。店
主さんの少し興奮したような息遣いが伝わってくる。

「ねえ……ほら、はやく♡……♡」

（恥ずかしい……恥ずかしいけど、我慢できない……っ）

「ち……、乳首もつ、もつと触ってほしいです……っ」

「あはっ、よく言えました♡ ご褒美あげますね♡」

その瞬間、店主さんの指先がピンッ♡と乳首を強く弾いた。

「ひああっ♡」

胸の上で乳首が揺れ、その振動が胸の奥、さらには子宮にまで届き身体が痺れる。

「あはっ、いい反応ですね♡ 乳首弾かれるの、気持ちいいですか？」

「ひあッ、気持ちッ……♡」

容赦なく何度も指先で弾かれるたび、弾けた振動が乳房全体をいやらしく揺らし
ていく。

ピンッピンッピンッ♡

「あはは、楽しくなってきた……♡ ねえ、もつとご褒美ほしいですね？ ほら、

欲しいって言って……？」

「ほしい、です……っ♡」

「あははっ、可愛い♡」

店主さんはクスッと喉を鳴らしながら、耳元やうなじにキスを落としていく。甘くゾワッとする感覚に吐息が漏れる。

「もつと沢山気持ちよくして差し上げますね♡」

それと同時に、オイルの滑らかな感触を残した彼の掌が、私の無防備な太ももへ滑り落ちた。

「んっ……♡」

浴衣の裾へ彼の大きな手が潜り込み、膝上から太ももの内側をゆつくりとなぞりあげられる。柔らかな肌を滑る掌の熱と、オイルの湿り気が直に伝わり肌の表面がゾクゾクと痺れる。

「て、店主さん……っ、そこは……っ」

「足湯で血行が良くなっていますからね。下半身の巡りも整えて差し上げます。これは、お客様だけの『特別』ですよ……♡」

彼の手は一切の躊躇なく柔らかい太ももの内側を優しく押し撫でながら、さらに上へと進んでいく。

そして指先が脚の付け根に近づいていき——ぬちり♡と私の濡れそぼったおまんこへ指の背を押し当てる。

「ああ……っ♡」

下着を着けていないそこは何も遮るものがないため、店主さんの指の感触がハッキリと伝わってきた。彼は押し当てている指の背を割れ目全体に、ぬちゅぬちゅ…♡と上下に滑らせていく。

「人の子が快楽を覚えると、ここが濡れてくるとは聞いていましたけど……。ふふっ、まさかこんなに、ぬるぬるになっってしまうなんて♡」

「あ……っ、ち、ちが……っ♡」

思わず必死に否定すると、店主さんは背後からクスツと喉を鳴らして笑った。意地悪く歪んだ彼の吐息が、首筋を熱く撫でる。

「違うのですか？ それならどうして、お客様のおまんこはこんなにも濡れているのでしょうか……？」

「そ、それは……っ」

「私に乳首をいじめられて……気持ちよくなったから、こんなに濡らしてしまったのでしょうか？」

「ひう……っ、あっ……言わないで……っ♡」

「言わないでつてことは、やはり合っているのですね。嘘をついてはいけませんよ？」

嘲笑うように口角を上げると、彼の長い指先がトロトロに溶けたひだの隙間に割つて入り、すりすり♡と隙間をなぞってくる。

「ふふつ愛液がどんどん溢れてきた……。お客様の体は、私に触れられるだけで、こんなに感じてしまうのですね♡」

「んあつ……。ごめんな、さい……。っ♡」

「謝らなくてもいいのですよ？ 私に触れられて、いやらしく感じてしまっている貴女の姿……。とても可愛らしいです♡」

店主さんは二本の指で、濡れそぼった柔らかな秘唇を優しく左右に押し開くと、その奥に隠れた突起を指の腹で捉えた。

「ああつ……。あッ♡ そこっ、ダメ……。っ♡」

「クリトリスに触れては駄目なんですか？ ですがここが一番、熱を持って赤く膨

らんでいますよ?」

指先で小さな突起をキュツと優しく掴まれ、感触を確かめるようにむにむにっ♡と揉まれる。

「ひあッ……♡」

頭のとっぺんまで突き抜けるような、甲高い悲鳴が喉から溢れた。足湯に浸かっていた足先が中でキュツと丸める。

「ふふっ♡ 本当は駄目ではないのでしょうか? ほおら……指で擦るとピクピクッて可愛らしく震えていますよ♡」

店主さんはオイルと私の蜜で濡れた指の腹でクリトリスの先端を、円を描くようにくるくる♡と撫で回す。

ぬるぬる♡ にゆるっ♡ ぐにぐにっ♡

「あ、んっ……やあ、っ……♡」

「ふふっ可愛い声♡ もう我慢できなくなっちゃってますね♡ ほら、もつと解してあげますから、貴女の声、私に聞かせて……?」

するとクリトリスを上からグニユっ♡と押し潰すように指先で圧をかけられる。
そのまま強弱をつけながら、ぐりぐり♡と弄ばれてしまう。

ぐにゅぐにゅ♡　くにくに♡　ぐりぐりっ♡

「ひゃあッ……あ、んッ♡」

「あゝあ、またこんなに愛液を溢れさせて……指が滑ってしまいます♡」

「んああッ……♡」

今度は指の腹で先端をピンッピンッ♡と激しく弾かれてしまう。

下腹部を襲う強烈な快感に身体を折り曲げそうになる私を、店主さんの空いた片手が優しく抱き寄せ、背中に彼の胸板がピッタリと触れる。

逃げられない体勢で熱く硬くなったクリトリスを指先で何度も弾かれる。それと同時に、反対側の手で乳首をむぎゅっ♡と摘まれた。

「ん、んああッ……♡」

店主さんは乳首の先端の平らな部分に指の腹を当て、じわじわと圧をかけて胸の奥へ押し込む。そのまま、ぐにゅにゅ♡と、かき混ぜるように指先を揺らし始める。

「あっ……んっ♡」

「ふふっ、こんなに肩を跳ねさせて……おっぱいの中に乳首押し込まれながら、ほじられるの気持ちいいですか？」

「あんっ……あ気持ちっ……♡」

「んっ、ふふっ気持ちいいの？ それなら、こうやって少し引っ張ってみるのはどう？ 気持ちいい？」

「ひぁあッ♡」

今度は押し込まれていた乳首を、きゅっ♡と指先で摘まれ、ゆつくりと上に引っ張って皮膚をピンと張らせる。そのまま引っ張った状態で、コリコリ♡と先端を捏ね回される。

「引っ張っ……乳首、伸びちゃう……っ、あんッ♡」

「ふふっ、乳首が赤く熟して可愛らしくなってきましたね♡ ほら、どうですか？ 気持ちいい？ 答えてくれないともっと乳首引っ張っちゃいますよ？」

店主さんは私の答えを急かすように乳首を摘んだまま小さく揺らす。胸全体に甘

い刺激が押し寄せて、私は喘ぎながら必死に声を上げた。

「あつ、きもちつ、いい……ですからっ……♡」

「ふふつ、よく言えました♡」

「ひゃつあ♡」

摘まれている乳首を限界まで引つ張られると、急に指を離される。その振動で私の乳房がたゆん、たゆん♡と淫らに揺れた。

「ふふつ、酷くしちゃいましたから、今度は優しく撫でてあげますね♡」

赤く腫れた乳首の先端をスリスリ♡と優しく撫でられる。ゆっくりとした胸の愛撫に反して、下腹部では愛液で濡れたクリトリスを指の腹で押し潰し、円を描きながら擦り上げていく。

スリスリスリ……♡ むぎゅむぎゅつ♡

ぐにゅにゅ♡ こすこすこす……♡

（乳首もクリトリスもどっちも……気持ちいい……イッちゃう……っ♡）

頭では拒絶したいのに、耳元で聞こえる淫らな水音と彼の甘い吐息、そして肌か

ら直接伝わる彼の熱が、私の理性を溶かしていく。

「あッ、あ……っ♡ 店主、さんっ……っ♡」

「店主ではなく『琥珀』とお呼びください」

「こっはく、さんっ……？」

「ふふっ、良い子ですね。ほら、私の名前を呼びながら、可愛くイってみて下さい……♡」

「えっあ……そん、なっ♡」

「ほら、呼んで？ 私の名前……貴女の可愛い声で沢山呼んで欲しいです♡」

琥珀さんの声が低く落ちたと同時に、私の身体を弄ぶ指の動きが激しさを増した。撫でられていた乳首をぎゅむっ♡と挟まれ、コリコリ♡とすり潰すように捏ねられる。そしてクリトリスを指先でピンッピンッ♡と激しく左右に弾かれた。

「あっダメっ、イッく……っ、こはく、さん……っ♡」

その瞬間、背筋に強烈な快感が走り抜けた。視界が真っ白に染まり、全身の筋肉

が硬く強張る。足先の指までガクガクと震え、子宮から熱い波が押し寄せてきた。

「んっ、あ……ッ♡」

達してしまった私の身体は小さく痙攣し、愛液が溢れだし彼の指先をさらに濡らしていく。私は荒い息を吐き出しながら、ただ呆然と琥珀さんの肩に頭を埋めて震えることしかできなかった。

すると私の頬へ琥珀さんの大きな掌がそつと添えられ、そのまま優しく首を傾けられ、横を向かされる。

「はあ、はあ……っ、こ、琥珀……さん……？」

「ふふっ、上手にイけてえらかったですね。とても愛らしいです♡」

甘い囁きが耳に届いた直後、彼の柔らかい唇が私の唇をなぞるように重ねられた。すり、むに……と滑るような唇の感触に、余韻で痺れた身体がピクリと反応する。そのまま僅かに開いた唇の隙間を押し開かれると、彼の長く温かい舌が口内へと侵入してきた。

「んむ……ッ、あ……っ♡」

驚きで逃げようと舌を引こうとしたが、彼はそれを許さなかった。逃げようとする私の舌を巻き付けるように絡め取り、根元から先端までしつこく擦り合わされる。じゅぶ、くちゅ♡と淫らな水音が口内で響き、溢れた唾液が更に滑りを良くしていく。舌の裏や粘膜の過敏な部分をじつくりと舐め上げられ、絡め取られるたび、身体の熱が増していくようだった。

（ダメ……っ、息が、できない……っ、けど気持ち……♡）

抵抗する力すら失い、私はただ彼の濃厚な口付けを受け入れる。やがて、ちゅっ……と名残惜しそうな音を立てて唇が離れた。

薄っすらと瞼を開けて見上げると、彼の瞳はどこか妖しく、熱を帯びて揺らめいている。

——チリン……。

その時、静かな店内に鈴の音が清らかに響き渡り、二人同時に体を僅かに震わせ

る。

「……………はあ、残念ですが、もう閉店時間になってしまいました。今夜はここまでですね」

琥珀さんは少し不満げに溜息をつく、そつと私から身体を離れた。そして温かい濡れタオルを取り出すと、オイルと愛液で乱れた私の胸元や下腹部を、優しく丁寧に拭いて取っていく。

肌に触れるタオルの温もりで、私の麻痺していた理性が急速に呼び覚まされていた。

（私……見知らぬ男性に、なんて破廉恥なことを……ッ！？）

我に返った途端、猛烈な恥ずかしさが押し寄せ、私ははだけた浴衣の合わせを直して彼を見上げる。

「あ、あの自分で拭きますから……！」

「駄目ですよ。私の施術でこんなに濡らしてしまったのですから、私の手で綺麗にさせてくださいね♡」

「そ、そんな……というか絶対に、あれは施術じゃないですよね……？」

赤くなった顔を隠しながら抗議すると、琥珀さんはすました顔で首を傾げた。

「そんなことはありませんよ？ 肩の疲れはだいぶ良くなったでしょう？」

言われてハッと自分の身体に意識を向けると、驚くことに岩のように凝り固まっていた肩や背中の重みが消え去り、軽くなっていた。

「た、確かに……軽くなってます……」

「でしょう？ まあ私も少しやり過ぎてしまったところがありますけど……」

彼はすつと身を寄せると、私の耳元にフツと冷たい息を吹きかけてきた。

「ひやつ……！？」

「貴女はちよつと流されすぎですかね。そんなに警戒心が薄くては、悪い狐に食べられてしまいますよ？」

クスッと楽しいげに喉を鳴らす彼の様子に、騙されたような悔しさと恥ずかしさで目を大きく見開いてしまう。

「ふふつ、可愛い反応♡ はあ、なんだか貴女を帰したくありませんね……」

そう呟いた瞬間、私の腰元にふわふわとした温かく重みのある何かが絡みついていた。

視線を落とすと、そこにあつたのは琥珀さんの腰元から伸びる、しなやかな黄金色の大きな尻尾だ。その尻尾が寂しげに、私の身体に巻き付いてくる。

「え……ッ？ 本物……！？」

「おや、今頃お気づきですか？ 私は妖狐——そして、貴女が迷い込んだこの場所は、常世と現世の狭間なんですよ」

琥珀が優雅に微笑みながら告げた言葉に、私は息を呑んだ。作り物だと思っていた耳や尻尾が本物で、ここが現実の街ではないという事実、頭が追いつかなくなる。

「どうしました？ 私が怖いのですか？」

妖しい瞳で真っ直ぐに捉えられたまま尋ねられ、私は少し考えたあと素直に首を横に振った。

「怖くは……ありませんけど。すごく驚きました。……それと、尻尾、ちよつと可愛いですね」

「……」

琥珀は一瞬だけ驚いたように目を見開いた。

そしてすぐに、喉を鳴らして楽しそうに笑い出す。

「あはっ、貴女って本当に変わっていますね。ますます気に入ってしまいました」
琥珀さんは不意に顔を近づけると、私の唇にちゅつと軽いキスを落とす。

「んっ!」

「もし貴女も私を気に入ってくださったのなら、またこの店にいらしてください。
これを手にしていれば、いつでも訪れることができますから」

目を丸くする私を気に留める様子もなく、彼は袖の中から小さな鈴を取り出し、私の手の中にそつと包み込ませた。そして琥珀さんは私の耳元へゆつくりと顔を寄せると、甘く妖しい声で囁く。

「その時はぜひ、今夜の続きをさせてくださいね♡」

その言葉と妖艶な微笑みに、心臓が跳ね上がる。

どうやら私は、悪い狐さんの罠にまんまと引っかかってしまったらしい。

掌の中でチリンと小さな音を鳴らした鈴を握りしめながら、私は息を呑むのだった。